

2023 年度第 2 回入学試験問題

国 語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は 2 ページから 8 ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字は楷書で、一点一画でいねいに書きなさい。かいしょ
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ふられて会社を休むなんてみっともないことを、まさか自分がするとは思ってもみなかった。もつと大人だと思ひ込んでいた。私自身が騙されていたくらいだから、恋人も、会社の同僚たちも、まわりの人間は皆、私のことをしつかりした大人の女だと思っていたんじゃないだろうか。

悲しいときに泣けない。つらいのに微笑んでいる。そうして、別れたくないのに追いつがれなかった。この、気持ちと身体がちぐはぐな感じ、身体の動きが気持ちの動きに追いつけない感じ。覚えがある。ゆっくりとわかる。もしかしたら恋人もこんなふうだったのかもしれない。

脳目もふらずに働くと、なぜだか仕事がどんどんまわってくる。ますます働くようになる。これでいいのだと思っていた。一所懸命働くことが私の道だと信じた。仕事にかまけて恋人との約束を何度もキャンセルした。

電話で断つてもメールで済ませても彼は怒らなかつた。顔は見えなくても薄く微笑んでいるのがわかる。それが彼のやさしさだった。少なくとも、最初のうちは。ほんとうは怒ったり嘆いたりしたいときでも、やさしい恋人であろうとして気持ちを抑えていたに違いない。私はそれに甘えてしまった。そのうちに、感情を表すべきときにも、私の前ではうまく出すことができなくなつたんだと思う。いつのまにか1ガラスのように醒めた目で微笑むばかりになつた。

陽子ちゃんも似ていた。とつてつめたような明るさは痛々しくて、そばで見ていると苛々するほどだった。でも、陽子ちゃんにもどうしようもなかつたのだ。自分が苦しくなつて初めてわかる。笑つたり泣いたり怒つたり、感情を素直に出せるのは相手に恵まれているときなのだ。私は自分のことに精いっぱい、恋人の気持ちの揺れも陽子ちゃんの反転も受けとめることができなかつた。

陽子ちゃんと知り合つたのは近所のパン屋だった。

仕事の帰りに、あるいは週末に、家で食べるためのパンを買う。それにはこの店の、小麦の匂いのふんと立ち上がる堅いパンがいちばんだった。小麦と水と天然酵母だけで焼かれた素朴なパンだ。特に宣伝しているわけでもなさそうなのに、店には客足が途絶えることがない。普段着で、ひとり買いに来る女

性客が多く、地味なパンがひっそりと売れていく。世の中は私が思っているよりも上等なかもしれない。この店に来ると、そう思うことができた。

その小さな店で一度だけパン教室が開かれた。(略)

参加者は女性ばかり十五、六人だった。パンを焼くのがまったく初めてなのは、驚いたことに私ひとりだったようだ。みんな、家でパンなんか焼くんどうか? いつ? なんのために? 聞いてみたい。聞いてみたい、と思ひながら、篩に取つた小麦を延々とかきまわし続けた。こうやってフスマを取り除くのだそう。休みなく粉をかきまわすうちに掌は赤くなり、額にはうっすらと汗をかいていた。ふと顔を上げると、台の端で店の主人が黙々と小麦を篩い続けている。a無骨な求道者のようにも見えた。

想像していた優雅な教室とは違い、課される作業はひたすら地道で厳しかった。しかも、主人がいちばん熱心なのだ。手を休めるわけにもいかなかった。いくつかの班に分かれてけっこうな重労働に励んでいたせいで、別のグループの人とは言葉を交わす機会もないほどだった。だから、実習中の陽子ちゃんの様子を私は見えていない。見ておきたかつたな、と思う。柔らかな髪を白い頭巾に包んで一心不乱に粉をこねていたんだろう。

教室の終わりに、焼けたパンを試食してひとりずつ感想を述べた。私はへとへとだった。パンはたしかにおいしかった。イベントとしては成功かもしれない。しかし、あの工程を思うととてももう一度自分で焼く気にはなれなかつた。

楽しかつたです、おいしかったです、お店のパンが自分でも焼けるなんて感動しました——参加者たちが順々に2つるつるした感想を述べていき、いよいよ私は戸惑つた。楽しいというなら、のんびり映画でも観ているほうが楽しい。おいしかったけれど、窠から出したばかりで、しかも鼻目が入つて三割増にはなつている。だいたい、手取り足取り教えられてなんとか焼き上がったのだ。余裕のある感想などまるで出てこなかつた。

「私は自分では決して焼かないことにしました。この店でずっと買い続けます」凛とした声でそう宣言した人がいた。まったく同じ気持ちだったから、私はうつむいていた目を上げて発言者の顔を見た。髪の長い、可愛い女の子だ。それが陽子ちゃんだった。

帰り道で一緒になつた。

「びっくりしたなあ。いくら挽きたてがおいしいからって毎朝その日の分だけ小麦を製粉するなんて」

前を向いたまま陽子ちゃんがいった。私は隣で小さくうなずいた。

「それをぜんぶ手で漉すんだもの。篩にかけて、混じってるかどうかもわからない外皮をくまなく探す」

毎日そこから始める人がいるのだ。私たちは言葉少なに商店街の中を歩いた。

上等だと思っていた世の中を、実はなめていたのかもしれない。適当にやっていたら、適当にやっていける。社会生活十年目にしてそんなふうに思いついてきたところだった。適当にやってちゃ、あのパンは焼けない。いつどんなときに食べてもしみじみとおいしいものが、適当につくられるわけがなかった。

世の中にはいろんなすごい人がいて、ぱつと思いつくアイデアのすごい人もいれば、地道な作業を淡々とこなすパン屋の主人みたいな人もいる。あたりまえといえどもあたりまえなのに、ぱつとするほうに目を奪われて、パン屋の主人に気づかない。少なくとも私はパン教室に参加しなければずっと見過ごしたままだったろう。

「今日は参加できてよかったよ」

陽子ちゃんが放心したようにつぶやいた。

「すごい人に会うと敬虔な気持ちになるね」

私たちはふたたびうなずきあった。

ちようど分かれ道に来ていた。(略) ここで分かれたら広い空の下でひとりぼっちだ、という気がした。角のドーナツショップに、どちらからともなく入った。

陽子ちゃんはドーナツを食べながら、ごく簡単に自分のことを話した。都内の女子大を出て、文具メーカーに勤めているという。私とは二歳しか違わない。もつと若くふわふわして見えたから意外だった。

お互いに自己紹介をしようか、と私たちにはほとんど話すことがなかった。

こういう可愛らしいタイプの女の子とは接点がない。私たちの間の共通点はたったひとつ。今日のパン教室に参加して、**3打撲を負ったこと**だけだ。とはいえず、できたばかりの打撲傷の場所も深さもお互いに計りかねていたんだと思う。うすいコーヒーを飲んで、長い間ふたりとも黙っていた。

「ほんとはね」

と、やがて陽子ちゃんが口を開いた。

「あたし、パン屋になりたかったんだ」

「うん」

「でもやめた。あんなの見ちゃったら、楽に美味しいパンを焼こうなんて考えられなくなるもの」

それから**b不意に**うつむいた。涙が一粒トレイの上に落ちた。

とっさに私は目を逸らしていた。おかわりのコーヒーをもらうふりをしてあわてて立ち上がる。思いがけない涙だった。さつき初めて会ったばかりの人間の前で涙をこぼせる素直さにうろたえていた。うつとうしいと思った。そして同時に**4なんだか猛烈にうらやましかった**。

それが三年ちよつと前だ。

何の共通点もなかった私たちだったのに、それからたまに会ったり電話で話したりするようになった。いろんなところが違っているけど、パン屋で打たれてしまった、その点でしつかりと結ばれていた。あのとき、無難な感想をいった十数人の顔はひとつも覚えていない。打たれるにも資質がいるのだ。それを初めて知った。

私は私の仕事をきわめようと夢中で働きはじめた。パン屋で受けた打撲をやらげるにはそれしかないと思った。照明器具をつくっている会社の営業事務だ。適当にやっていた頃よりも仕事はどんどん面白くなっていった。ただし、生活は変わった。外食が増え、肩こりがひどくなり、友人が目減りした。

陽子ちゃんとは、ずれていった。はじめから一点でしか結ばれていなかったのだ。会うたびに、そして話をするたびに、違う部分が大きくなりすぎてほめてしまいそうになる。陽子ちゃんは陽子ちゃん自分の打撲の手に必死だったのかもしれない。でも、陽子ちゃんがどこへ向かっているのか私にはさっぱりつかめなかった。きつと陽子ちゃんにも私の進む方角は見えなかったらう。

土手の上を走っていた自転車が小石につまずいて斜面を転がり始めるような勢いで、陽子ちゃんの髪はどんどん短くなっていき、前か後ろかわからないような服を着るようになり、話していることと顔の表情が食い違うようになって

た。文具メーカーも辞めてしまったという。つまりいた小石がなんだったのか、実のところ私にはわからない。うるたえるほど大粒の涙を落としたあのとときの陽子ちゃんが、私にとつての陽子ちゃんのすべてだったのだから。

陽子ちゃんは今ちよつと道に迷っているだけだ。そう思おうとしたけれど、気分は梅雨空みたいに曇るばかりだった。陽子ちゃんは陽子ちゃん自身にどんなごまかされていくみたいに見えた。(略)

「梨香さんは頑なすぎるよ。もつと楽にいこうよ」

それで私は、もう陽子ちゃんとは会わないほうがいいと思ったのだ。結び目はあるのに、たしかにあつたはずなのに、ずいぶん遠く離れてしまった。今は話もほとんど通じない。

「楽に、つてどういうこと」

できるだけ穏やかに私は聞き返した。楽にパンを焼くなんてできない、といって泣いた陽子ちゃんが今では嘘みたいだ。そうはいえずに、手探りで結び目を確かめる。これだけが頼りだった。たしかにきつく結ばれている。だけどその先、別々の方向へ二本の糸は続いている。(略)

空港に降り立つ(注1)と完全に夏だ。空が真っ青で、空気が濃い。

石垣島まであつという間だった。ここから先はフェリーだ。もうすぐ夕暮れのはずなのに、この明るさはなんなんだ。なんなんだ、なんなんだ、と辺りをきよろきよろしながら歩く。むせそうな暑さ、肌(はだ)に吸いつく人懐っこい空気は、いったいなんなんだ。

次第に足が軽くなるのがわかる。明るいことや楽しいことはずっと遠くのほうに去ってしまった、私にはもう訪れることもないような気がしていた。それなのに、島を歩くうちにどんどん人恋しくなっている。

そうか、陽子ちゃんもこんな気持ちになったのか。そう思うとおかしくて、いとおしさも満ちてくる。南の島をひとり堪能するつもりが、海風に煽られ太陽に灼かれ、とてもひとりじゃいられなくなったのだらう。その震えが電波(注2)に乗って私に伝わった。道理で断れなかったわけだ。ふられたばかりのところ(注2)にビリビリきたのだから。

5 私たちはもつといい方向に小石を蹴らなきゃいけないんじゃないか。船着

き場の棧橋(さんざい)で碧い海を見ながら思った。到底かなわないような人に打ちのめされても、それでもパン屋になりたいと願う強さを育てなくちゃいけないんじゃないか。

もちろん、陽子ちゃんにそんなことをいうつもりはない。ただ、そんなふう(注1)に思えただけで新しい風が吹いたような感じがしている。私はそつと結び目を確かめる。それはそこにちゃんと結ばれていて、やっぱり別の方向へ伸びていった。

(宮下奈都「転がる小石」『遠くの声に耳を澄ませて』(新潮社)より)

(注1) 恋人にふられて会社を休んでいた「私」は、波照間島(はてるまじま)に来ていた陽子

ちゃんに電話で強く誘われ、その近くの石垣島まで飛行機でやってきた。

(注2) 陽子ちゃんが「私」にかけた電話のこと。

問1 傍線部 a、b のここでの意味を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 無骨

ア 洗練されていないこと

イ しなやかで強いこと

ウ 信念を持つこと

エ 気骨がないこと

b 不意に

ア 意図に反して

イ 無意識に

ウ 突然

エ 不用意に

問2 傍線部1「ガラスのように醒めた目で微笑む」とありますが、この表現から恋人のどのような状態がうかがわれますか。本文中より最も適切な箇所を十四字で探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問3 傍線部2「つるつるした感想」とありますが、この表現に込められた「私」の思いとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 簡潔だ

イ 模範的だ

ウ 適切だ

エ よどみない

オ あたりさわりのない

問4 傍線部3について、「私」が「打撲を負った」とはどういうことですか。本文中のこばを用いて三十文字以上四十文字以内で説明しなさい。

問5 傍線部4「なんだか猛烈にうらやましかった」とありますが、「私」は陽子ちゃんのどのようなところを「うらやましい」と感じたのですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア よく知らない人の前でも自らの感情をさらけ出せる無邪気なところ。

イ ちよつとしたことにも涙を流してしまうような、感受性が豊かなところ。

ウ 初対面の「私」の前で悔し涙を流すほど、心から夢中になれるものを持っているところ。

エ 「私」も悲しい気持ちなのに、陽子ちゃんだけが素直に涙を流すことができるところ。

問6 傍線部5に関して、「いい方向」に小石を蹴ることができていない「私たち」について説明した次の文章の空欄に最も適切なこばを答えなさい。ただし、**A**、**C**は本文中よりそれぞれ二字で書き抜き、**B**は三十五文字以上四十文字以内で探して、その初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

【パン教室で「打撲」を負った後、陽子ちゃんはそれをごまかして**A**生きようになつていった。一方、「私」はそれをやわらげるために遮**二**無**二**働きはじめた。だが、やがて「私」は**B**ことができなくなり、今は恋人にふられて会社も休んでいる。二人は別々の道歩んでいるが、簡単には近づけないものに何があつても向かつていこうとする**C**を持つていない点で共通している。】

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

最近、昔に比べ障害者スポーツへの注目度かなり高まってきました。先日、パ

ラスリートを養成する大学が出てきていることが新聞記事になっていました。いまは誰もがオリンピックの後にはパラリンピックが開催されることを知っています。一九六〇年代、私が小学生の頃、少なくともテレビでパラリンピックの報道はなかったと記憶しています。

では最近なぜ注目されるのでしょうか。やはり日本人選手の活躍が最大の原因でしょう。でもマスコミの報道などを見て、私は、最近このスポーツへの注目の質が変わっているのではと思っています。

一枚のスキー板に乗り、急な斜面を猛スピードで滑走するスキー選手。上半身の筋力をフルに使い、疾走する車いすマラソン。見事に車いすを操りながら、相手が返せないところへボールを打つ車いすテニスの選手。車いすごと激しくぶつかりボールを奪いあう格闘技のような車いすバスケット、等々。テレビなどを通して、障害者がスポーツする姿が流されるようになり、彼らが熱中している姿や本気度、競技そしてスポーツとしての洗練度に私たちは、改めて驚き、感動しているのではないのでしょうか。

なぜ驚き、感動するのでしょうか。

多様な障害があるにもかかわらず、それを**a**コクフクし、自らの肉体や精神を磨きあげ、スポーツのルールを遵守し、そのなかでより高みへと向かう障害ある人々の規律ある姿にひととしての美しさを感じ取り、私たちは感動しているのでしょうか。こうした感動が、通常のスポーツアスリートの姿への感動とまったく同じ情緒に由来しているのか、そうでないかを検討することは、障害者の問題を考えるうえで、とても重要だと思えます。ただ、ここでは、ちよつと別の視角から障害者スポーツのことを考えてみることにします。

先ほど注目の質が変わつてきているように思えると言いました。それはマスコミの報道などを見ていて、**1**障害者スポーツに対する固定した見方が崩れつつあるという感覚と言つてもいいかもしれません。

たとえば、車いすバスケットの試合を見ていて、私はこう思います。確かに足や下半身に障害がある選手が車いすを見事に操つてバスケットボールの試合をしている。しかし、この競技は障害ある人々だけが参加することができるスポーツなのだろうか。下半身に障害のない人でも、何らかの形で下半身を固定し、車いすに乗ることができれば、車いすバスケットという競技をすることができたらどうか。

またブラインドサッカーの試合を見ていて、私は同じことを思うのです。この競技は

視覚障害の人だけに開かれたスポーツなのだろうか。障害のない人の目を見えない状態にして、ブラインドサッカーができるのではないだろうか。

そしてこうした思いの先にある問いが、以下のようなものです。

はたして障害者スポーツは障害のある人のためだけのスポーツなのだろうか。身体どの部位に障害があるか、またその程度などで区分けして行われる水泳などの競技は、やはり障害ある人のための競技だと言えるでしょう。しかし私たちがひとくくりにする障害者スポーツは、障害ある人だけのためにという意味ではなく、競技方法の工夫などに由来する違いや個性がさまざまにあります。それゆえ、車いすバスケットは、主に障害ある人々が行う競技であるとしても、障害者バスケットではなく、「車いす」バスケットと私たちは呼んでいますし、ブラインドサッカーも、視覚障害者サッカーではなく、**2ブラインド**、つまり目が見えない状態で行うサッカーと、私たちは呼んでいるのです。

こうした見方は、障害者スポーツをめぐる私たちが持つ「あたりまえ」の知を確実に揺るがすのではないのでしょうか。たとえば私がブラインドサッカーをやるとして、目隠しし、視覚障害がある選手と対等に競技ができるでしょうか。できないでしょう。上手な選手の足手まといになるのがオチです。視覚が遮られたなかで、周囲の声や音を聞きわけ、状況を瞬時に判断し、次のプレーに移れる能力において、私は視覚障害のある選手からはるかに劣っているからです。

私が上手になるためには、ブラインドであることに慣れ、ブラインドであるからこそさらに**bト**ぎ澄まされるべき力に気づき、それを鍛えていかなければならないでしょう。つまり、ブラインドサッカーという競技や競技の現実において、「見えること」をめぐる常識や価値はすべて、いったん無効になります。そして、私は「見えない」なかでどのようにプレーができるのかを考えざるを得ないし、「見えないこと」をめぐる常識や価値と向きあわざるを得なくなるのです。

ルールが守られ、厳格な規律が遵守される競技空間で、普段私たちが「あたりまえ」だと思ひこんでいる支配的な常識や価値が見事に転倒されるのです。そしてこうした転倒が起こることこそ、障害者スポーツがもう一つの面白さであり、感動を生み出すもどではないでしょうか。

もちろん、私がブラインドサッカーをして、少しばかり上手になつたからと言って、視覚障害のある人々の気持ちやより深いところにある思いなどを完璧に了解できる

などとは思わないでしょう。でも障害をめぐるさまざまな決めつけや思いこみが息づいている支配的な常識や価値を「あたりまえ」だと思ひこんでいた私の日常に、確実に亀裂が入るだろうし、私はそのことで障害という「ちがいが」それ自体とよりまっすぐに向きあえるようになるでしょう。そして、「ちがいが」私の日常にとって、どのような意味や意義をもつかを考えていくための想像力もより豊かになっていくだろうと思うのです。(略)

さて私たちは「ちがいが」のある他者とどう出会えるのでしょうか。私は以前、障害者を嫌がり、嫌い、恐れるというこの背後になにかがあるのかについて考え書いたことがあります(好井裕明「障害者を嫌がり、嫌い、恐れるということ」石川准・倉本智明編著『障害者の主張』明石書店、二〇〇二年、八九―一七ページ)。これを書きながら、そこでもとめたかつての個人的体験を思い出していました。詳細は、私の論文を読んでいただければと思いますが、それは私のドンキリ体験であり、障害という「ちがいが」になぜ私たちが普段から、まっすぐに向き合えないのかを考えることができる体験だったのです。

温泉につかつて「無」になること。これは私の**シユミ**というか、生きがいというか、これをしなくては私が枯れてしまうというとても大切な営みなのです。ちよつとぬるめの湯につかつて完全に湯と一体化し「無」になるまでの時間、意識や思考はまだしつかりしているのですが、そのうちに身体は広い湯ぶねにくまなくとろけだし、ちよつど私の「頭」だけが湯にただよっている、そんな状態。このとき、私はえもいえない快感にひたります。そしておもしろいことに、この「頭ただよい状態」のとき、私の思考は**bト**ぎ澄まされ、いろいろな発想がわいてきたり、ある問題への考えが一挙に進んだりするのです。

いつものようにスーパー銭湯にでかけ「無」になろうと湯ぶねにつかり、とろけようと全身の緊張感をといて、ふと目をあけたところ、湯ぶねのふちに五、六歳ぐらいの少年が立っていたのです。「ああ、かわいい子やなあ」とまた目を閉じようとした瞬間、私の視線はその子に釘づけになっていました。彼の両腕は極端に短く、彼はその小さい手で顔をかきながら、そこに立っていました。私は、さまざまな構えをはずし無防備になり、いわば丸裸で「無」になろうとしていたのですが、瞬間、少年がすつと私のなかに入り込んできた、そんな感じがしました。不意をつかれ、ドキッとしたので

す。つまり、私はいわばまったく無防備な状態で、両腕が極端に短い障害ある少年と出会ったのです。

私はなぜこんなにもドキッとしたのだろうかと考えながら、「無」にならずに、周囲を観察していました。みんな自然にふるまっていました。それは明らかに3「つくられた、ぎこちない」自然さでした。裏を返せばとても「不自然で、どこか緊張した戸惑い」とでもいえる空気がそこに満ちていて、ただ少年のみが、そしていつしよに来ていた若いおとうさんがごく自然に風呂を楽しんでいたのです。

考えるべきは、この「不自然で、どこか緊張した戸惑い」であり、私のなかに生じたドキッリなのです。それは障害ある人を露骨に排除する行為でもないし、障害ある人を嫌ったりする情緒でもありません。丸裸で無防備な私が、障害ある人を目の前にして、自分のふるまい方がわからずドキギギしている状態といえるかもしれません。また障害ある人と自分との距離をどのように「適切に」とつていいのかわからない、そんな戸惑いかもしれません。

そんな細かいこと言ってしまうの。普段よくある場面だろうし、深く考えないで無視しておけばいいのではないか。そんな声が聞こえてきそうです。でも「無視すること」もまた、なかなか難しいのです。

「無視すること」は、ただ相手を見ないということではありません。それは、私が相手を見つめていないこと、関心がないことを相手や周囲にたいして、具体的なふるまいで「適切に」示さなければならぬ営みなのです。そして私の体験や銭湯での「空気」は、まさに障害という「ちがひ」と「適切」に出会い、「ちがひ」ある他者と「適切」にやりとりできている自然な日常ではなかったということなのです。

少しめんどくさく言ってみましょう。他者を理解するということは、心の次元の問題ではありません。シュツツやエスノメンドロジの考え方からすれば、それは、他者とのように日常的な関係をつくりあげることができるのか、そうした関係がどのように実践的で処方箋的な知識を用いてできあがっているのかを考える問題なのです。またそれは、私と他者が日常的な関係のなかでどのように相互的な信頼をつくりあげることができるのか、また距離を保つことができるのかなどを考える私と他者の相互行為の次元にある問題なのです。

私たちは、普段他者と出会う時、その人を瞬時のうちに理解し、どのようにふるまえばいいかを判断しています。そうした判断の背後には他者を理解するために必要な

幅広く深い知識の在庫があり、この在庫から、その時その時に「適切」だと思ふ知識を引き出して、他者と向き合っているのです。

とすれば、4「ちがひ」ある他者とのように向き合えばいいのでしょうか。まず言えることは、「ちがひ」をめぐる知識の在庫をできるだけ豊かにすることでしょう。薄っぺらな知だけでは、「適切に」向きあうことができないでしょう。従って障害という「ちがひ」に由来する豊かさに触れることはできないだろうし、その豊かさを感じ取る想像力さえも私の中に、育ってくることがないからです。

また言えることは、すでにある在庫の知識を常に疑ってかかることの大切さです。たとえばブラインドサッカーに実際に参加すれば、視覚障害という「ちがひ」をめぐる私たちの知識の在庫は確実に質量ともに豊かになるはず。その結果、「ちがひ」のある他者との出会い方や向きあい方も幅広く豊かに洗練されたものになるでしょう。

私たちの日常的な知識は、常に支配的な価値や支配的なものの見方の影響下にあるものです。そしてたいていの場合、支配的な価値やものの見方に従って暮らした方が楽であり効率がいいとは思っています。ただ、「ちがひ」のある他者と出会うとすると、こうした楽さや効率は、いったんカツコに入れておいた方がいいでしょう。むしろ支配的な価値が障害という「ちがひ」がもつさまざまな新たな意味や創造の可能性を私を感じ取るうえで、まさに「A」となるからです。

そして、一番大事なと思うのは、「ちがひ」がある他者との出会いで、生じるであろう新たな世界への入り口を見失わないように、私自身が他者を理解するためのセンス、いわば他者への想像力を常に磨いておくことであり、想像力を豊かにしていく楽しさを味わうことだと思えます。

「ちがひ」がある他者を差別し排除すること。それは、他者への想像力が劣化した結果生じるのであり、それは他者に深い傷や苦しみを与えるでしょう。でも同時に、それは私自身をも深く傷つけ、ひととしての厚みや豊かさを確実に私から奪っていくのです。

私が豊かに生きることができるとかどうか。それはまさに私が、「ちがひ」がある他者とどう出会うとするのかにかかっているのです。

(好井裕明『今、ここから考える社会学』〔筑摩書房〕より)

問1 傍線部 a c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線部1「障害者スポーツに対する固定した見方」とはどのようなものですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 障害者スポーツは、障害のある人のためだけに開かれたスポーツだという考え方。
イ 障害者スポーツは、障害のない人のスポーツよりも競技としての洗練度が高められていくという考え方。

ウ 障害者スポーツは、障害のない人のスポーツよりも純粋にひととしての美しさを表現できるという考え方。

エ 障害のある人が心身を磨き上げて高みを目指す姿に私たちが抱く感動と、通常のスポーツアスリートへの感動とは本質的に同じだという考え方。

オ 障害者スポーツは障害者向けのルールや規律が存在するという意味で特殊だが、それに従うならば障害のない私たちも参加できるという考え方。

問3 傍線部2「ブラインド、つまり目が見えない状態で行うサッカー」とありますが、それが障害のない人に及ぼす効果をどのようなことだと筆者は考えていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 視覚障害のある人のための競技に参加することで、障害という「ちがいが」そのもの持つ意味や意義を障害のない人同士が共有できること。

イ 視覚障害に応じて設定されるルールや規律は、障害のない人に「見えること」をめぐる日常的な常識や価値の重要性を改めて認識させること。

ウ 視覚障害のある人のための競技に参加すると、障害のない人は「見えない」人の気持ちやより深いところにある思いなどを完璧に理解できること。

エ 視覚障害のある人と人間的に平等になるために、視覚障害に応じて設定されるルールや規律を障害のない人にも受け入れさせること。

オ 視覚障害に対応したルールや規律に従うと、障害のない人は「見えること」と「見えないこと」をめぐる常識や価値と向きあわざるをえなくなること。

問4 傍線部3「つくられた、ぎこちない」自然さ」とありますが、それはどのようなことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 普段は障害のある人を排除したり嫌悪したりしないが、筆者は「不自然で、どこか緊張した戸惑い」を覚えたので、少年を「無視」してしまったということ。
イ 少年に対する「不自然で、どこか緊張した戸惑い」は、筆者にとって排除や嫌悪を意味せず、障害のある人との関係を実践的で処方箋的な知識を用いて成立させた契機となったということ。

ウ 排除したり嫌悪したりしてはいないが障害のある人とのふさわしい距離がわからず、「不自然で、どこか緊張した戸惑い」を覚えつつも、少年に対して皆が表面上は自然な態度を繕ったということ。

エ 湯ぶねにつかつて相互的信頼をつくりあげた全員が、少年に「不自然で、どこか緊張した戸惑い」を覚え、障害のある人を排除し嫌悪するというよりも、その場の雰囲気呑まれたということ。

問5 傍線部4「ちがいが」ある他者」とどのように向き合えばいいのでしょうか」とありますが、筆者は「ちがいが」ある他者」と向き合うためにはどうすることが必要だと考えていますか。本文中のことばを用いて、四十五字以上五十五字以内で答えなさい。

問6 **A**に入る最も適切なことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア 邪魔な障害

イ 豊かに生きる手段

ウ 従うべきものの見方

エ 他者を理解する助け

オ 差別や排除をなくす知

